井ケ谷窯の成立と実体

浅　田　員　由

1　はじめに

猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）は、東山地区、岩崎地区、折戸地区、黒笹地区、鳴海地区、井ケ谷地区の6地区に大きく区分されている。そのうち、猿投窯の東南端に位置する井ケ谷地区は、刈谷市の北部の、境川と逢妻女川に挾まれた丘陵地に展開された古窯跡群である。なかでも、古窯跡が集中して分布するのは、愛知教育大学の敷地となっている周辺から州原池にかけてのあたりである。現在のところ、確認されている窯跡は、須恵器・灰釉陶器の窯が56基、山茶碗窯が21基の合計77基である。(注1)

井ケ谷地区の77基という古窯跡数は、猿投窯の他の地区と比較してきわめて少ないものである。このため、昭和55年の「猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(I)」において、井ケ谷地区として独立するまでは、黒笹地区に含めて考えられていた。しかし、この古窯跡群が、黒笹地区とは異なる様相をもっていたことは、既に当初の段階から楢崎彰一氏によって予見されていた。それは楢崎氏によって、次のように記述されている。

「……おそらくこの南のグループから分枝したと思われる一群が、境川を越えた東南の丘陵地帯に飛火し、黒笹南部の支群を形成する。刈谷市井ガ谷の洲原池を中心に、その周辺の丘陵地帯二粁四方に拡がっている。この一群も黒笹第67号窯のように、すでに奈良時代後半期にはじまっている。このグループは猿投窯の主流をなすものではなく、南方の西三河平野の農村を対象とした、小地域生産の一群であろう。」(注2)

井ケ谷地区がこのとおり、西三河の小地域を対象とするローカルな窯業地であったのかどうかは明確ではないが、黒笹地区とは異なるものであったことは確かである。この小論は、井ケ谷地区の窯業について、その成立と実体について若干の考察を試みるものである。

2　三河の窯業

猿投窯井ケ谷地区は、尾張・三河の国境となる境川の東に位置しており、ほぼ全域が三河国に属するものである。三河国は、陶器生産国として知られているところである。

延喜式巻7神祇7践祚大嘗祭に次の記載がみられる。

「参河国所造　等呂須伎卌口。都婆波卅二口。大十六口 中十六口。多志良加八口。山坏。小坏各六十口。己豆伎。匜各六十口。」

この践祚大嘗祭にあげられている他の陶器生産国は、河内、和泉、尾張、備前の四ケ国で、いずれも古墳時代以来の須恵器生産地帯である。三河国がこれと並んでいることは、当時、あるいはそれ以前、三河国の陶器生産が、中央でも認められるほどのものであったことを物語っている。それでは、この践祚大嘗祭に貢納する陶器を生産したのは、一体どの窯であったのであろうか。

現在のところ、三河国に属する窯業地としては、次の地域が知られている。

1. 豊橋市東南部地域
2. 渥美半島
3. 岡崎・幸田地区
4. 井ケ谷地区

これらの窯業地のなかで、最も古い様相をもつものは、豊橋東南部地域である。特に、静岡県湖西市との境界付近には、7世紀から8世紀にかけての須恵器窯が50基以上存在している。その後、この地域の窯業生産は、北西5㎞ほどの大岩町付近に移り続けられる。しかし、平安期にはその生産力は低下していた。

渥美半島の窯業は、12世紀初頭ころに始まるもので、その最盛期は13世紀である。岡崎・幸田地区では、20基以上の窯跡が確認されているが、全体として規模が小さく、その主体は12世紀代である。

井ケ谷地区は、奈良時代後半の須恵器窯生産からはじまり、平安時代の初期には灰釉陶器に転換し、14世紀まで連続して窯業が続けられている。

この4地区の窯業地のなかで、延喜式の編纂された10世紀の初頭に生産の行われていた地域は、豊橋市東南部と井ケ谷地区であるが、生産力の大きいのは井ケ谷地区であった。しかし、践祚大嘗祭への貢納陶器が、井ケ谷地区で造られたものであったかどうかは明らかではない。それは、7世紀代に大量の須恵器を生産し、三河国を河内、和泉、尾張、備前などの国々に匹敵する陶器生産国としたのは、豊橋市東南部の窯業地であったに違いないからである。しかも、この地域は三河国府に近く、貢納陶器生産地にふさわしい地域でもあった。

また、践祚大嘗祭にみられる陶器の名称は、等呂須伎、都婆波、多志良加などで、同じ延喜式に記載されている尾張瓷器の名称と較べて、如何にも古式である。このことは、尾張瓷器の系統に連なる井ケ谷地区よりも、須恵器生産の伝統をうけつぐ豊橋市東部での生産を窺わせるものである。

それでは、井ケ谷地区の陶器生産は、どのような経過をたどったのであろうか。

3　井ケ谷窯のはじまるまで

西三河地域で最も古い窯跡は、豊田市亀首町上向イ田に所在する上向イ田古窯である。この須恵器窯は6世紀前半に位置づけられるものであるが、この窯からは円筒埴輪が出土していて(注3)、この地域の豪族が古墳築造にあたって開窯したものであることは間違いない。この埴輪を使用した古墳は、周辺からはみつかっていないが、豊田大塚のように須恵質埴輪を使用した古墳も知られており、上向イ田窯が地方豪族の部民生産として、単独的にあらわれたものとみることができる。それは、上向イ田窯が、窯業生産を継続することなく廃絶していることからも明らかである。

この上向イ田窯の位置する周辺は、物部氏の伝承の多いところで、国造本紀にあらわれる「三河衣君」も、このあたりを拠点とする地方勢力であったものと考えられる。いずれにしても、上向イ田窯は、埴輪や古墳の副葬品を焼成するために開かれた窯で、地域的な供給を意図して行われたものではなかった。

次にこの地域に窯が造られるのは、7世紀後半である。この窯は、西加茂郡三好町福谷字下リ松に所在する、下リ松古窯である。この窯は、猿投窯黒笹地区に含めて考えられており、愛知県の分布調査報告では、黒笹91号窯とされているものである。この窯で特筆すべきことは、白鳳期の瓦が焼かれていることである。(注4)

この瓦は、軒丸瓦が複弁蓮華文で、軒平瓦が四重弧文という、川原寺様式のもので、伴出の須恵器が、岩崎17号窯式であることからみて、7世紀後半に築窯されたことは間違いないであろう。この7世紀後半は、猿投窯が東部に拡散する時期で、窯の数も急激に増えはじめる時であった。

しかし、下リ松窯については、寺院建立にあたり、その瓦を焼成した特殊な窯とみるべきであろう。

下リ松窯から出土した瓦を使用した寺院跡は、東南約 1.5㎞の伊保白鳳寺である。この地は、律令期の賀茂郡伊保郷に含まれるところで、おそらく伊保郷を支配した豪族によって建立されたものであろう。その瓦窯も、後になってまわりに多くの窯が築かれたとはいえ、決してそれらの先駆となるべきものではなかったことは確かである。

しかし、8世紀初頭になると、この地にも窯業生産がはじまる。それは、前代に境川の西側まできていた猿投窯が、境川を越えた東側丘陵での展開がはじまったということである。ただ、ここで考慮しておかなければならないのは、現在三好町の北部となっている、黒笹・福谷の地域が、窯の築かれた時点において、はたして三河国とすることができるかどうかである。

猿投窯の技術水準を示す陰刻花文陶器は、K－90号窯、K－89号窯などであるが、これらの窯はすべて、現在の尾張と三河の国境、つまり愛知郡東郷町と西加茂郡三好町と境を接する谷の両側斜面に展開している。これらの灰釉陶器は、明らかに尾張瓷器と呼ばれたものに間違いなく、そうとすれば、三好町も含めたこの地域は尾張の領域であったはずである。少なくとも、境川上流における尾張と三河の国境は、かなりあいまいなところがあったのではなかろうか。いずれにせよ、8世紀初頭には、境川の東側丘陵で窯が開かれる。井ケ谷地区で窯業生産がはじまるのは、この次の段階である。

4　井ケ谷窯のはじまり

井ケ谷窯で最も古い時期の窯は、NN－32号窯式のものである。これは、8世紀後半の年代を与えられるもので、猿投窯の各地区ではこれ以前に窯業生産がはじまっている。しかも、猿投窯における灰釉陶器の初現は、8世紀中頃のI－25号窯式と考えられており、井ケ谷窯の成立は、灰釉陶器の生産がはじまってからのことといえる。

井ケ谷窯の所在する刈谷市井ケ谷町は、境川中流域の東岸に位置しており、7世紀代の井ケ谷古墳群も存在していて、ある程度の生産力をもった地域であったことが知られる。そのため、上流の三好町域が尾張・三河との帰属が明らかでないのと違い、三河国碧海郡に属する(注5)地域であったことは間違いない。

碧海郡は、この境川の東から碧海台地を包括し、矢作川西岸に至る広大な地域を郡域としており、「倭名抄」には16郷が記されている大郡である。特に、矢作川中流の西岸は、宇頭古墳群、橋目古墳群、桜井古墳群などが築かれており、桜井古墳群の二子古墳は、この地方最大の前方後方墳である。このことからも碧海郡の古墳時代における生産力の高かったことが知られる。おそらく、三河国造氏の本拠は、この地域であったに違いない。これらの古墳群を形成した豪族の末裔は、郡司層となり、実質的にこの地域を経営したものとおもわれる。

井ケ谷窯は、三河国府からは最も遠い地域にあり、しかもその技術は尾張国からの影響を受けていることなどから、国衙の直接的な経営によるものではなかったに違いない。むしろ、この地域の郡司クラスの豪族によってはじめられた可能性は大きいであろう。それには、井ケ谷という地域のもつ条件もあった。

井ケ谷地区は、「倭名抄」に載る智立郷に属するものとおもわれる。ここには、式内社の智立神社がある。智立神社は後に三河二宮とされる大社で、おそらく、智立郷を含めてこの地域の有

力な豪族によって祀られたものであろう。勿論、井ケ谷窯の成立について、智立神社の果した役割は不明であるが、製品の販路を考える時には、大きな意味をもっているのではなかろうか。

今一つの条件は、この地が東海道に沿った交通の要衝であったことである。当時の東海道の正確な経路は明らかではないが、この井ケ谷地区で尾張と三河の国境をなす境川を越えたことは確かである。現在の東海道は、知立神社の南を通っているが、かってはその北を通っていた。このことは、当時の街道が、有名な八ツ橋を経過していることからも明らかである。井ケ谷の窯業は、まさにこの東海道に面した輸送の好条件によって支えられたものである。

境川の上流は、猿投窯の中心ともいえる黒笹地区の、しかもK—90号、K—89号といった、陰刻花文陶器を生産した古窯地帯となっている。これらの窯で焼かれた製品が、どのルートによって尾張国衙あるいは、京都にまで運ばれたのかは明らかではない。しかし、律令制下における官物輸送が、原則的には官道を利用している以上、尾張瓷器としての猿投窯製品が、官道である東海道によって運搬されたことは間違いないところである。特に、黒笹地区を縦断して流れる境川はその中流において東海道と交差している。これまで、境川における河川交通の状況については明らかにされていないが、陶器という、破損しやすく、しかも重量のある製品の運搬に適した輸送手段の一つとして、今後充分に検討されるべきであろう。すくなくとも、境川による輸送は、きわめて可能性が高いものといえる。

このように考えてみれば、境川を運ばれた尾張瓷器は、当然、当時の東海道に近接する地点で陸揚げされ、以後は陸路によって熱田あたりに運ばれたのであろう。

このように、井ケ谷窯は、猿投窯の技術を導入し、独自の輸送と販路が可能であるという立地によって次第に発展していくのである。

5　井ケ谷窯の展開

井ケ谷地区における最も古い窯は、IG—46号窯（駒場瓦窯）である。この窯は、奈良時代初期に築窯されたものとおもわれるが、いわゆる猿投窯の窯業生産としてあらわれるものではなく、寺院の建立に際し、瓦及び什器を供給する目的で造られたものである。この瓦窯で焼かれた瓦は、慶雲廃寺で使用されたといわれている。慶雲廃寺の所在地は明確ではないが、知立市八橋があてられている。この寺の建立者は、周辺地域を支配する豪族で、おそらく郡司クラスの者であったに違いない。(注6)

慶雲廃寺の瓦を焼成した駒場瓦窯と井ケ谷窯が直接に関係するかどうかは不明であるが、この地域に寺院を建立する力をもった豪族があらわれたことと、井ケ谷窯の開窯は無関係ではないようにおもわれる。

この、井ケ谷から八橋にかけての境川と逢妻川に囲まれた地域は、古墳時代以前の遺跡に乏しいところで、慶雲廃寺のあらわれるまでは、山林原野として、大きな在地勢力もなかったところであろう。しかし、慶雲廃寺が建立される頃には、このあたりも交通の要衝として開発が進んだものとおもわれる。

慶雲廃寺から西へ3㎞のところに、知立神社がある。このあたりは、逢妻男川と逢妻女川の合流点の南で、早くから開けたところである。知立神社は、「延喜式」に所載される、碧海郡六座の一つで、その位置も古代以来のものである。そして、ここはまた「倭名抄」にいうところの、碧海郡知立郷の中心であると考えられる。

奈良時代において、この地域を支配した豪族は明らかになっていないが、知立神社を祭祀した一族によって、慶雲廃寺が建立されたことは明らかであろう。それは逢妻川北部と逢妻女川上流域への勢力伸張と軌を一にしていた。そしてそれはまた、尾張と三河を結ぶ東海道の掌握でもあった。井ケ谷窯が成立するのは、まさにこの時期であったのである。

井ケ谷地区に最初に、猿投窯の技術を導入した窯が築かれる奈良時代後半は、他の猿投窯地区においては、既に窯業への基盤がかたまり、灰釉陶器の生産が始まろうとする時期であった。

この時点における三河国の陶器生産は、三河東部の、豊橋市東南部地域で行われていた。特に、7世紀から8世紀にかけての古窯跡は、50基以上と推定されており、その生産力の大きさが知られる。三河国が、陶器貢納国として認められるのは、これらのことからであろう。しかし、その陶器生産も、平安期に入ると激減する。その原因としては、須恵器生産の長期継続による燃料や陶土の枯渇や貢納体制の変化などが考えられるが、尾張瓷器の隆盛ということもあったに違いない。

猿投窯では奈良時代中期には灰釉を施した陶器が生産され、平城京からもそれが出土しているが、その段階においては、他国産の須恵器と区別して扱われてはいない。しかし、平安時代の初期には、特別の製品として認められるものとなった。それ以降、いわゆる猿投窯の灰釉陶器は、尾張の特産品として貢納され、また各地に供給されるのである。井ケ谷窯はその技術を導入しているわけで、当然、三河国衙としてもその生産力を利用したに違いない。それは、猿投窯以外で、最初に灰釉陶器が焼かれるのが、豊橋市東南部地域であることからも明らかである。

日本後記　弘仁六年の記事に

「造瓷器生尾張国山田郡人三家人部乙麻呂等三人、伝習成業、准雑生聴出身。」とある。

このことは、尾張瓷器の技術習得が官営で行われたことを物語っており、その技術は、容易に他国へ移されるものであったことが知られる。特に、尾張と三河の間における陶器生産は、技術の相互移入が密接であったとおもわれる。それは、次の例からも窺える。

延喜式　巻七、神祇七　践祚大嘗祭　に、「凡応供神御雑器物。所司具注所須物数。預前申官。八月上旬差宮内省史生。遣五国監造。河内。和泉一人。尾張。三河一人。備前一人。」の記事がある。

これは、践祚大嘗祭に必要な陶器の製作にあたっては、宮内省から監督の役人を派遣するということであるが、それは、尾張と三河を兼ねている。この宮内省の史生が、乙麻呂のような陶工であったかは不明であるが、少なくとも、ある程度陶器生産のことが理解できる者であったに違いない。あるいは、そうした技術者を連れていったかもしれない。少くとも、陶器の生産を「監造」できたはずである。しかも、この史生は同時に、尾張国と三河国の生産を監督しているのである。尾張と三河は、国衙間の公式旅程は二日間である。もし、尾張の官窯がより国衙に近い、尾北古窯にあり、三河の官窯が豊橋市東南部とすれば、両者を同時に監督することはきわめて困難である。一人の史生で充分であったということは、両者が近接していたために違いないとおもわれるのである。これは、河内国と和泉国についても同様である。両国の陶器生産地は、河内・和泉国境にまたがる陶邑古窯跡群で、きわめて近接している。

このことから、践祚大嘗祭に貢納する陶器は、三河国においては井ケ谷窯で、尾張国においては黒笹窯で生産されたことが推定できる。黒笹地区と井ケ谷地区の中心は、直線距離にして約7

～8㎞で、それこそ半日ほどの距離である。この程度ならば、充分に両者の監督ができるに違いない。

しかし、この史生が身分的には低いとしても、公式に宮内省から派遣されている以上、何度かは三河国衙にも出向いているはずである。そうした機会をとらえて、豊橋市東南部の窯業を経営していた豪族達は、尾張瓷器の生産技術を導入したのであろう。むしろそれは中央の意志によって、積極的に進められたのかもしれない。しかし、良質な陶土が得られない地域では、結局、瓷器の生産は困難であったのである。

6　井ケ谷窯の性格

井ケ谷窯は、8世紀中頃から9世紀中頃までの、いわば、弘仁瓷器以前の窯跡が30基、9世紀中から10世紀中頃の平安時代前期の窯跡が16基となっている。この比率は、井ケ谷窯が、尾張瓷器と称される灰釉陶器への転換において、猿投窯の中心部(注7)とは同じでなかったことを物語っている。それは、同時期と考えられる窯から出土した遺物においてもうかがえる。

昭和45年に発掘調査された灰山古窯（IG—36号窯）は、K—14号窯式期に比定されるものであるが、出土品全体の様相は、きわめて須恵器的傾向といえる。このことは、報告書の中でも示唆されている。また、灰釉陶器としては、碗、皿、長頸瓶の類が多く、特殊な製品としては、浄瓶、平瓶(注8)などがあげられ、品種構成の上ではK—14号窯式期の特徴を示しているが、碗、皿などそれぞれの器種におけるバラエティーが少ない。たとえば、灰釉碗では、「大きく湾曲する体部の口端を外側へ曲げている。高さのわりに口径が大きい」一種類が出土しているだけである。また、脚付の碗、皿類がみられない。

この傾向は、寺山第1号古窯（K－119号窯）についても同様である。この窯は、K—14号窯式期の新しい方、K－5号窯の時期のものである。寺山第1号窯は、長頸瓶(注9)の出土が特徴的であるという。

「本窯で焼成する陶器のうち、もっとも数の多いのは長頸瓶である。完形品3点をはじめ各種多量に出土した。」

水瓶・浄瓶・長頸瓶などの瓶類が各種多様に生産されたのは、前代の0－10号窯式期からIG—78号窯式期である。K—14号窯式期以降は、むしろ碗、皿などの日常食器類の生産を主体としてきたのである。寺山第1号窯の段階において、長頸瓶が特徴的な生産であったとすれば、やはりこれは井ケ谷窯の一つの性格といえるであろう。

以上のことは、比較資料が少ないことや、猿投窯の最も中心的な窯であるK—14号窯と比較することは無理があるとしても、一つの傾向としてあらわれていることも事実である。

このことから、井ケ谷窯は、中央と直結した黒笹地区の窯が、越州窯の青磁碗と模倣したり、より高級な製品を産み出そうとしたのにくらべ、やはりローカルな窯であったといえる。特に、寺山第1号窯において長頸瓶が多く焼かれていたことは、そうしたことを強くあらわしている。猿投窯の灰釉陶器が初期の段階で地方に流通するのは、主として長頸瓶、短頸壷の類である。これは、地方ではまだ、日常食器類に灰釉陶器を使用するまでに至っておらず、そうした製品は特殊な用途に限られていたからである。たとえば、蔵骨器や仏花瓶として短頸壷や長頸瓶を使用することがせいぜいであったのである。

井ケ谷窯が、長頸瓶の生産に一つの特徴をもつとすれば、それは灰釉陶器の需要が、まだそう

した段階にとどまっていたからに他ならないのである。それは、需要層が、中央ではなく地方にあったことを示している。

7　井ケ谷窯の衰退

11世紀の終り頃になると、猿投窯は無釉の山茶碗生産に転換する。そしてこのことは、それまでほとんど猿投窯が独占してきた陶器生産の技術が、瀬戸、常滑、渥美などの広範囲な地域に拡散したことでもある。特に、井ケ谷窯の属する三河国においては、再び豊橋市東南部地域での窯業が盛んとなってくる。その流れは、渥美半島の中央部においてもあらわれてくる。

山茶碗窯といわれる、主として碗、皿を大量生産する窯業は、その製品が日常生活の雑器ということもあって非常に大規模に発達する。そして、14世紀初頭、瀬戸の灰釉碗などに代わられるまで、生産が続くのである。これは、特に窯跡の数からいえば、いわゆる猿投窯においても、圧倒的に山茶碗窯が占めていることからも窺える。しかし、井ケ谷地区においては、若干その様相が異なる。現在知られている窯の区分は、山茶碗窯21基に対して、須恵器、灰釉陶器の窯が56基である。この数字は、井ケ谷窯が中世的な窯業生産の転換にのりおくれたことを示している。つまり、井ケ谷窯は、猿投窯の他地区が、一斉に山茶碗窯へ転換し、また、それまで窯業の行われていなかった知多半島や渥美半島においても山茶碗が大量に生産されているのに対して、その生産は前代に劣っているのである。少なくとも、延喜式の編纂された時点において、三河国の窯業の中心地であった井ケ谷窯は、既にその面影を失っていたといえるのである。

一つには、三河国における窯業の中心が渥美半島の中央部、いわゆる渥美窯に移ったこと、今一つは、猿投窯全体が、新興の窯業地である瀬戸窯や常滑窯に圧倒されはじめていて、なかでも弱少の井ケ谷窯がその影響を最もうけやすかった、というためであろう。特に、中世最大の窯業地として発展する常滑窯は、もともと井ケ谷窯の後背消費地を形成している西三河地方に近縁のところで、海運を利しての製品輸送も容易であることから、より大きな打撃を与えたに違いない。

井ケ谷窯は、猿投窯の他地区が、山茶碗という雑器を大量生産することによって、少なくとも14世紀初頭までは隆盛したのに対し、既にその栄光を渥美窯に譲って、ごく小規模な地域生産を続ける窯業地となっていったのである。

参考文献

注 1.　愛知県猿投西南麓古窯跡群分布調査報告　1982　愛知県教育委員会

注 2.　猿投窯『陶器全集』1970　平凡社

注 3.　豊田市史　1975　豊田市史編纂委員会

注 4.　猿投町誌　1970　猿投町誌編纂委員会

注 5.　刈谷市誌　1958　刈谷市史編纂委員会

注 6.　注 3 に同じ

注 7.　注 1 に同じ

注 8.　井ケ谷古窯址群 ── 愛知教育大学用地関係古窯調査報告 ── 1970　愛知教育大学

注 9.　同　上